

1945年夏、ドイツと日本、そして憎悪の結果

トーマス・グッドリッチ

The Palms Press, 2018

<書評>

Reviewed by Tadashi Hama (日本語訳「史実を世界に発信する会」)

トーマス・グッドリッチは「人間の闘争の結果として不可避免的に起こる残虐行為」という心臓の悪い人向きではないテーマにかんして多くの著書を書いている。

『頭皮はぎの踊り』Scalp Dance (Stackpole Books, 2002)は、アメリカ・インディアンとの戦争に関するかれの著作であり、インディアンと白人の拷問と虐殺の報復合戦を記録している。グッドリッチの著書を読むと、直観的に信憑性が高いと感じる。それは、日記や個人的な回想録から引用していて、加害者にも生き残った被害者にも、存分に言い分を述べさせているからである。グッドリッチの話には、センチメンタリズムが入って来る余地はない。現代という「文明化され」かつ「啓蒙され」た時代に育った我々は、白人のインディアンに対する生々しい憎悪の話を読むと鼻白んでしまうだろう。したがって、この本を読もうとしても氣勢をそがれてしまうだろう。

グッドリッチの最新刊である本書の主題は第二次世界大戦である。戦争に行かなかった人々や戦争のずっと後になって生まれた人々は、この戦争をセンチメンタルな目で眺めがちである。現代人の戦争観は1930年代から40年代の米国人の圧倒的多数が抱いていた強い反戦気分の戦争観とは好対照を成している。当時の米国人は、「民主主義のために安全」な世界を作るために戦った欧州戦争（第一次世界大戦）の無意味な虐殺をよく記憶していたのである。それにもかかわらず、真珠湾が攻撃されると、米国政権は、マスメディアの支持を得て、米国の若者を戦死させるために太平洋へヨーロッパへと送り出したのだった。今一度、民主主義世界を救おうという大義名分だった。¹ そして、戦後今なお

¹ 米国の世論と政策の大転換についてさらに歴史的詳細を知りたい人は、Barnes, H.E.の*Perpetual War for Perpetual Peace*を参照されたい。Caldwell, ID: Caxton Printers。ルーズヴェ

見果てぬ夢から覚めることができないのである。米英ソの連合軍がファシズムと戦い、ファシズムおよびファシズム的なものを悉く葬り去ったという夢である。

敗者も勇敢に戦い断乎とした態度を示したのである。それなのに、敗者の声は勝者の声に押し潰されしまった——歴史を書き、敗者の運命を記述するのは勝者だからである。グッドリッチは指摘する。「ドイツ人に対する犯罪、日本人に対する犯罪については、滅多に語られることがない。ドイツと日本の何百万もの女性と子供に対する計画的な焼夷弾爆撃、無数の女性と子供に対する大規模なレイプ、残虐行為についても触れられることはない。さらには、この両国の国民が今日に至るまでみじめな屈辱をうけさせられている事実も見て見ぬ振りをされている。

米国の元ジャーナリストであるトム・ブロコウが、著書『もつとも偉大な世代は語る』(The Greatest Generation Speaks) (ランダムハウス社 2001) の中で、第二次世界大戦の公式的な物語を語ってくれる。言い換えれば、これが政治的に正しい見解なのだ：「かつて存在したこともなかった強力で無慈悲な軍事マシンの手から世界を救おうという呼びかけに答えて、彼らは立ち上がった。このマシンは狂信的なファシストたちが世界征服の道具として開発したものだ——戦争が終わった時、男も女も、軍人も民間人も、およそ戦争に巻き込まれた人々はみな、祝賀の列に連なった。もつとも、それは東の間の喜びであったのだが——彼らは、個人的責任、職務、名誉、信用という価値観に忠実だった」。ブロコウの一派は、公式的な物語から毒を抜いて語る。ハリー・トルーマンの言葉を要約した形で、連合軍の兵士は、「自由を回復」し、世界から「悪」を「除去」したというのである。連合軍の兵士たちは、「自由」のために戦ったのであるから、捕虜を殺害したり、民間人を虐待したなどということは想像もできないというのである。公式的な物語を支持するということは、真実の歴史を意図的に無視することに外ならないが、それだけには留まらない。歪曲された歴史を受け入れ、さらに「神を味方」に付け、戦争は正義の戦いになると信じ込むことが、人々が知るべきことになってしまうのである。そういう思考方式からは、更に戦争が生まれ、悪のスパイラルが続くばかりである。

ルト政権は反戦の声を挙げた人々を沈黙させ、その信用を失墜させるために、必死の工作をした。たとえば、Duffy, J.P.(2010)などがその被害者である。「リンドバーク VS ローゼンヴェルト」NY, NY: MJF Books; Hoover, H.(ed. Nash, G.H.)(2011), *Freedom Betrayed*. Stanford, CA: Hoover Institute Press.

公式的な物語が圧倒的に普及し、戦時中の徹底的な検閲があったために、本書評の冒頭で述べた、「殺せ、殺せ」の連呼は、「悪辣」かつ「ファシスト」のドイツと日本が言ってるのだと思ってしまいうだろう。しかし、歴史に盲目にされている人々は驚くだろう。冒頭に引用した残虐な言葉は、実は連合側、つまり民主主義の名の下に戦っていた人々の口から出たものなのだ。

最初の引用「できるだけ早く、奴らを片付けるべきである」は、ウィンストン・チャーチル首相の言葉である。ドイツの捕虜になって解放されたソ連兵がソ連に送還される時に言ったものである---この捕虜たちが、帰国したら強制労働を課せられるか、おそらくは殺されることになるということをチャーチルは知っていた。

二番目の引用「奴らを全部殺せ。壮年も、老人も、子供も女も。斃り殺しにするのだ」は、ソ連のジャーナリストであるイリヤ・エレンブルグが言ったものである。彼はドイツ民族を絶滅させなければならないという悪魔の信念を持っていた。

最後の引用「多数の女や子供を殺さなければならないことが分かっていた。…やらなければならないなかったのだ」は、1945年3月の東京への焼夷弾爆撃の理由について、米空軍大将カーティス・ルメイが述べた所信である。この空襲では、民間人（10万人以上）が「焦げて、焼かれて、蒸されて死んで行った」というのに。

「わが国の兵士たち」が戦った相手はドイツ人だった。ドイツ人は、人種的にも文化的にも米国の白人に近い。それにもかかわらず、米国の政治的、軍事的な指導層から軽蔑されていた。フランクリン・D・ルーズベルトとハリー・トルーマンの両大統領、および連合軍遠征軍最高司令官ドワイト・アイゼンハワーもそれらの人たちだ。ドイツ軍は1945年5月8日に降伏したが、そのずっと以前から、連合軍はドイツ人の戦争捕虜や民間人を殺害していた。ドイツが正式に降伏した後でも、ドイツ人に対する侮辱はやまなかった。不幸にも捕虜になったドイツ人は、戸外にトイレを並べただけの場所に閉じ込められた。多数の人が餓死した強制収容所に倍する数だった。捕虜になって監禁されたドイツ兵は、「騎士的な赤軍」によって反復的な拷問を受け、最後には死ぬか、まったくの冤罪の告白

するかのいずれかを選ばなければならなかった。²

たいていの米国人は、「わが国の兵士たち」の恐ろしい行動について何も耳にしたことがないだろう。なぜだろうか。ドイツが武器を捨てた後の期間、米国政府はずっと検閲を行っていた、とグッドリッチは指摘する。米国政府はメディアに、味方は「神格化」せよ、敵は誹謗せよ、と命令した——その結果、「掠奪、強姦、殺戮」³の話は本国の米国人の所までは届かなかったのである。グッドリッチは、メディア全体が「プロパガンダに飼いなされた『従順な羊の群』」と化してしまった、と述べている。虐待があったという報告が大手メディアに入ってきたことが分かると、米国の官僚とアイゼンハワー将軍は、米国人による悪行をただちに否認し、それはドイツ人の仕業だったと責任を転嫁するのだった。現代の人々は、米国の歴史をよく勉強するようになってきているから、米国が、「自由」と「民主主義」のためにまた戦争をすると宣言しても、大きな声でそれに疑問を投げかけるのである。

本書が類書と画然たる違いを見せるのは、米国の白人が、「よこしま」で、異質の日本人に猛烈な憎悪を抱いていることに焦点を当てている点である。グッドリッチは、「日本人を悪魔にするのは簡単な作業だった」と書いている。日本人は害虫のような存在だと看做されていた。そして、本書は、「殺虫剤」や「ネズミ捕り」が、「昆虫とモグラと日本人」を殺すのに最適です、という広告があったと本書は指摘している。⁴ 日本の軍人や民間人が投降して来るのを、米国人が狙撃する様子を本書は詳細に描き出している——害虫を殺すのと変わりはないかったとのこと。なんと、本書によれば、兵士たちは敵兵を捕虜にしないように命令を受けていたという。類書を見ると、日本兵も同じように人種差別をしていたと述べて、米兵の蛮行の弁解に務めている（ジョン・ダワーの『容赦なき戦争』

² ドイツが降伏したずっと後まで共産圏では捕虜の監禁と拷問が続いていた。それに関する歴史の詳細は、Sack, J.(1993)の *An Eye for an Eye: Basic Books* and MacDonogh, G.(2007) *After the Reich*. NY, NY: Free Press

³ 「解放された」ヨーロッパにおける米国人の乱行の詳細は、Hitchcock W.(2009) *The Bitter Road to Freedom*, (NY, NY: Free Press) を参照されたい。

⁴ 米国政府の出版物は、日本人を恐ろしい野獣として描き出している。日本陸軍について米国国防省が発行した情報用小冊子には、「大抵の日本兵は、百姓の出身である」と書いてある。（日本陸軍についての兵士用ガイド 陸軍情報局1944年11月15日） 高名な児童書作家テオダー・ガイゼル（セウス博士）でさえ、戦争に協力して、日系アメリカ人は破壊工員であり、日本人は化け物であると書いている。

(War without Mercy) (パンテオン・ブックス, 1986) が、グッドリッチは、そのような姑息な手は使わない。日本兵の恐ろしさは米兵と同じか、あるいはそれ以上のものがあつたと、ダワーなどは示唆しているが、米兵は、日本兵の負傷者や死者の体の一部を切り取って、本国の恋人に送ったりしているのである。1944年1月の統合参謀本部の指令は、日本兵の肉体を切り取って記念品を作るとを禁止してはいる。しかし、ルーズヴェルト大統領は6月に、日本人兵士の腕の骨で作ったレターオープナーを有難く受け取っている。⁵

米兵は日本兵を「汚い動物」とまで呼んでいた。その日本兵狩りに彼らを駆り立てたものは何だったのだろうか。一つには、当時は教育レベルが低かったために、兵士が簡単に政府のプロパガンダに乗ってしまったということがあつただろう。米軍で、「読み書きができる」という判定を受けるためには、小学校四年生程度の英語を読んで理解できればよかつたのである。⁶ 真珠湾の以前には、徴兵年齢に達した者のうち、347000人が選抜徴兵登録カードに署名することができなかつた。第二次世界大戦の退役軍人を対象にした調査によると、彼らの中の平均的な者は、11年就学したが、卒業証書はもらわなかつたという所だつた。⁷ しかし、また、考えてみると、米国の白人の日本人に対する憎悪の念は、単にマスコミの報道に刺戟されてパブロフの犬のように涎を垂らしたのではなく、米国人の心の底深くに潜む異様な感情から出ていたのかも知れない。トム・ブロコウの『もっとも偉大な世代は語る』には、「ジャップ」という単語が3回しか出て来ない。この書の中には、太平洋に駐屯する「ジャップハンティング」の米兵の手紙が含まれていることを考慮すると、いささか奇異の念に打たれる。とはいえ、その3つの例の一つは故ダニエル・イノウエの回想である。この人は、上院議員になり、名誉勲章を授与されているが、終戦直後にジャップと呼ばれたという。しかも、このとき、イノウエは、米軍将校の制服を身に着け、名誉の戦傷で右腕を失っていたのである。さらに、カリフォルニア州オークランドでは、理髪店で調髪を断られたとのこと。

⁵ Weingarten, J.J.(1992) The trophies of war. (戦争の戦利品) *The Pacific Historical Review* 61:53-67

⁶ Frey, M.(2015) Education, classification, and military strength: a look at the development of the US Army during World War II.
https://history.army.mil/events/ahts2015/presentations/seminar6/sem6_MarkFry_text_ImpactOfEdLevels.pdf

⁷ Light, P.D.(1988). *Marching Upward*, Thesis, Virginia Polytechnic Institute and State University.

『1945年の夏』は、戦闘員・民間人を問わず、戦争がどんな被害を及ぼしたか平和時（戦後に）行われた連合軍のドイツ兵に対する拷問、捕虜収容所への拘禁から戦中の日本の無防備の都市の住民に対する焼夷弾攻撃までを躊躇なく詳細に示している。人類の究極の恐怖、原子爆弾の体験もきちんと描かれている。読者は、本書によって連合軍がどんな恐ろしいことをしたかを知れば、終戦後に行われたいわゆる戦争犯罪裁判が適切なものであったかどうか、グッドリッチと同じように、じっくりと考える機会が与えられることになるだろう。第二次世界大戦の公式のおとぎ話に安住している人は、本書を無視するのもよからう。

しかし、グッドリッチの最新刊である本書は、歴史的真相を追求する人を間違いなく啓蒙してくれるだろう。真相と神話のギャップは大きい——ヨーロッパ戦線と太平洋戦線で戦った退役軍人エドガー・ジョーンズは、グッドリッチの言葉を引用して、感動的な問を投げかける。「我々がどんな類の戦いをしたと民間人は思っているのだろう」と。